

# 今、神道を見直す —Something Great への感嘆と崇敬の念—

唐澤 太輔（早稲田大学社会科学総合学院・助教）

キーワード：神道、産霊、南方熊楠、通路（パサージュ）、  
Something Great

## はじめに—なぜ今、神道か—

3.11以降、「絆」が一つのキーワードになった。「絆」——つまり我々は、人と人との「結びつき」は勿論、人と自然、人と祖先との「結びつき」を震災以降、改めて考えることになったのである。この「結びつき」は、これまで、当たり前ものとなり過ぎ、影に隠されてしまっていた。しかし危機的状況に陥り、この「結びつき」＝「むすび（産霊）」は、我々の眼前にまざまざと現われ出てきたのである。同時に、あまりにも近すぎるが故に、あまりにも遠くに感じられていた「自然そのもの」「生命そのもの」が、我々に直接に語りかけて来たのである。いや、「語りかけ」は常に既にあった。しかし我々は、普段、「生命（生—死）」について深く考えることはなく、それは「地」として隠されてしまっていたのである。それが今、「囟」として浮かび上がって来た。——例えば、掛けている「眼鏡」は、すぐ手元にあり今読んでいる本より「遠い」。なぜなら、普段それを掛けていることを忘れていたからである。「近く」に在り過ぎるものは逆に「遠い」のである。今、この「眼鏡」にひびが入った。そしてこれまであまりにも当たり前になっていた「結びつき」が、「生命」が、「自然」が、我々の眼前に現われた。

神道は、我々に「結びつき」を深慮させる。神道は、我々に「生命そのもの」を深慮させる。我々と隣人との「結びつき」はどうあるべきか、我々と祖先との「結びつき」はどのようなものか。我々をまさに在らしめる「生命そのもの」（「自然」と言っても良いし、「存在」と言っても良い）と我々との「結びつき」はいかなるものか。神道を考察することは、これらの問いに対する「道」を明示してくれる。我々は今こそ、いや「絆」が問われている今だからこそ、まさに神道を、神道的在り方を、見直さねばならないのである。

## 1. 神道の感覚—畏怖の宗教とアニミズム—

小泉八雲（1850～1904年 ラフカディオ・ハーン Patrick Lafcadio Hearn）は、ある秋晴れの日、出雲大社を参拝した際、宍道湖を船で渡り、その湖水、そして霞たなびく八雲山・大山の山並みを見、こう述べた。

There seems to be a sense of divine magic in the very atmosphere, through all the luminous day, brooding over the vapory land, over the ghostly blue of the flood, — a sense of Shinto. (Hearn 1894 : 174)

まさにその空気の中に神聖で魅惑的な感覚があるようだ。——その全ての神々しい光を通して、畏れ多くその霞たなびく土地、その幻めいた青い湖水を覆う空気の中に——神道の感覚があるようだ。(和訳—唐澤)

これこそまさに「神道の感覚」であろう。それは爽快でもあり、また心落ち着くものでもある。しかし一方で、妖しくもあり、不気味でもあり、また圧倒的でもある。一言で言うならば「畏怖のトーン（鎌田 2003 : 26）」である。本居宣長（1730～1801年）の言葉を用いるならば、この「感じ」は「もののあはれ」と言えるであろう。宣長によれば、それは「見る物きく事なすわざにふれて、情の深く感ずることをいふ也」（『石上私淑言卷一』）と定義されるものである。宣長は、歌などの芸術はすべてこの「もののあはれ」を感じることによって始まるとする。「歌は物のあはれをしるよりいでくるものなり」（同上）。また、「物のあはれをしる」と言っても、その「しる」働きは、概念的に（頭で）理解するのではなく、いわば「感得」するということである。

神道は、「愛と救いの宗教（例えばキリスト教）」や「慈悲と悟りの宗教（例えば仏教）」などとは一線を画す、素朴な「畏怖の宗教」と言えるであろう。宣長は、神道における「神」を「世の常ならず、すぐれたる徳のありて、畏きもの」と定義した。「畏きもの」<sup>1</sup>、つまり有り難く、尊く、また怖れおののくようなものである。また「神」の枕詞は、「ちはやぶる」であるが、これは「ち（霊・風・血・乳・道）」と呼ばれるエネルギー（霊威）が、勢いよく（はや）、激しく振動しうごめく（ぶる）さまを言う。つまり神道においては、何事につけ、畏く、凄まじい威力を発揮するものはみな「神」としての特性を持っているのである。だからこそ古来日本人にとって自然はまさに「神」だったのである<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 神前で「かしこみ、かしこみ」と唱えられているように、神道における「神」は、恐怖や畏敬の念を感じずるものである。また殆どの祝詞は「かけまくもかしこき」から始まるが、「かけまくも」とは、「神」の御名を直に口で言うこと、心にかけて思うことすら畏れ多いという意味である。因みに、祝詞は本来人間が創作した言葉ではなく、神霊の訪れにおいて自然に発露した、いわば霊的告知あるいは啓示である。

<sup>2</sup> 八雲は古代ギリシア人と日本人の精神が似ていると指摘する。

自然と人生をたのしく愛するという点では、日本人の魂は、ふしぎにも、古代ギリシア人の精神によく似ている。…（中略）…余は、こうした日本人の魂について、多少なりとも知りたいと思うと同時に、他日、いつかはまた、こんにち神道と呼ばれ、古くは神ながらの道と呼ばれていた、この古い信仰が、現在もなお生きている、その偉大なる力を語る日が、かならずあるだろうと思つている。（小泉 1955 : 259-260）

このように八雲が日本と古代ギリシアの「感覚」とに類似点を感じたのは、彼がギリシア生れであることと深く関係しているであろう。

「八百万の神々」と言う如く、神道においては、様々な「ちはやぶる」、「畏きもの」が神になり得る。我々日本人の先祖は、巨木や滝や泉などに深い畏怖の念と共に感謝の念を抱いていた。なぜならそれらは森の多様な生命を生み出し育む源だったからである。またそれは同時に、我々がそれらに生命を吹き込んでいたことを意味する。このような「アニミズム」は、神道の、というより原・日本人の、大きな特性であろう。因みに、「アニメーション」の語源は「アニミズム」であるが、一見無機質な絵に、動きや声（台詞）や感情、そして多様な擬音を与える作業は、日本人が最も得意とする分野である。日本のアニメは世界でも「Cool Japan」の代表的なものとなっている。これ程日本においてアニメが発達し、また世界中を感動させている背景には、我々日本人の根底に「神道の感覚」が流れているからではないだろうか。神道はアニミズムに深く通ずるものである。

本稿では、この「神道の感覚」とは何か、そしてその可能性について主に、「神道」という言葉の意味、神社（鎮守の森）の在り方、「産霊」<sup>むすひ</sup>の思想的意義の三点からアプローチを行っていく。

## 2. 「神道」という言葉—The Way from KAMI or The Way to KAMI—

さて、外国人に「神道とは何ですか？」と尋ねられた時、日本人である我々は何と答えるであろうか。例えば、「神道とは日本固有の民族宗教で、アニミズムやシャーマニズムや八百万の神々の民俗信仰を基盤として習合的な歴史的展開をとげた信仰と生活文化の総体であり、その具体的表現が神話と祭祀とその伝承の場としての神社である（鎌田 2003：24）」などと一応は答えることができるかもしれない。しかし当然これだけでは、神道の概要はつかめても、その本質は分らないままである。その本質を知る為には、まず「神道」という言葉の意味を明らかにし、次に神への Access Point たる「神社」、さらに神道が最も重視する「産霊」<sup>むすひ</sup>を明確にする必要がある。

「神道」という言葉には二つの意味がある。一つは「神からの道（The Way from KAMI）」であり、もう一つは「神への道（The Way to KAMI）」である（鎌田 2003：32 参照）。「神からの道」とは、いわば「神」「生命そのもの」たる「存在」から、この世に存在するあらゆる「存在者」へ通ずる道（通路）である。「神への道」とは、この世に存在する「存在者」から、最も根源的なものである「神」「生命そのもの」たる「存在」へ至る道（通路）である。つまり、「神からの道」においても「神への道」においても特徴的なのは、神と人間を繋ぎつつ混ぜ合わせるような「通路」が重視されている点である。「神道」という言葉における「道」——それは、ベンヤミンの言う「通路（passage）」<sup>パスージュ</sup> 3、あ

<sup>3</sup> 「通路」<sup>パスージュ</sup>について、ヴァルター・ベンヤミンは以下のように述べる（『パスージュ論』）。

パスージュはそのなかでわれわれが、われわれの両親の、そして祖父母の生をいまいちど夢のように生きている建築物なのだ、ちょうど胎児が母親の胎内で、動物たちの生をいまいちど生きているように。

（Benjamin 1928～1940／今村訳 2003：238）

「通路」<sup>パスージュ</sup>——そこでは、祖先の生と、現在を生きる我々の生が混じり合う（mix する）。そこは、人間か動物か、まだ区別のつかないものが蠢く「母胎」のようなものである。両項の区別が不鮮明になり、また両項の特性が混じり合う処、それが「通路」<sup>パスージュ</sup>なのである。

るいはハイデガーの言う「空開処 (lichtung) (川原 1981 : 229, 563 他)」に類似するものである。  
 例えば、ハイデガーは以下のように述べる (『同一性と差異性』)。

さて存在とは何か？我々は存在をその始源的意味に従って現前存在 (Anwesen) と考えよう。  
 存在は人間にとって随伴的にも例外的にも現前に存在する (west...an) のではない。存在はそれの語りかけによって人間に関わる (an-geht) ゆえにのみ、現成し (west) 且つ持続するのである。何故ならば人間こそ、存在に向かって明潤に、存在を現前存在として到来せしめるからである。そのような現前-存在 (An-wesen) は、或る明るさの明潤さ (das Offene) を使用し、かくこの使用によって、人間本質に委ねられている。(Heidegger1957/大江訳 1960 : 17-18)

真の「存在」(=「存在そのもの」)は「現前存在」として人間と合する。人間は、「存在」の呼びかけに応答する。「存在」は人間を必要とするのである。つまりハイデガーによれば、人間こそが、「存在」からの語りかけを聞き(暗黙的にであれ把握し)、それに呼応することができる存在者なのである。また当然、人間も「存在」を必要とする。この「存在」は、「生命そのもの」と言い換えても良いであろう。そして「生命そのもの」(存在)と人間(個的生命)が互いに交流する場こそが、ハイデガーの言う「或る明るさの明潤さ」(あるいは「空開処」)である。両者(存在〔生命そのもの〕と人間〔個的生命])が混じり合う「空開処」の在り方は、即ち「存在—空開処—人間」という関係を示す。「空開処」、それは「<sup>パスナー・ジュ</sup>通路」でもある。つまり、神道における「道」は、我々人間とそれ以外(=神々)が交感する処なのである。

確かに、ハイデガーが言うように、人間のみが「存在」を問うことができる存在者(現存在)であることは間違いない<sup>4</sup>(だがそもそも、人間が問い得る「存在」とは、既に人間の手垢の付いてしまった「存在」であり、真の「存在」とは呼べないとも言える)。しかし、それは人間が他の存在者より優れていることにはならないであろう。例えば人間以外の生物は、殆どこの「存在」に常に既に溶け込んでいる。だからその意味を問い確かめる必要さえないとも言える。人間だけがそのいわば「溶解状態」から浮き出たが故に、その意味を問い確かめる必要が出てきたのだ。そのような意味で、人間が他の生物に比べて優れているとは決して言えないのである。原・日本人はそのことを知っていたはずである。その「存在」に(意識的に)近づく前には、我々が必ずまず「<sup>てみずや</sup>手水舎」で手・口を清めるのはそのことを端的に表している。つまり「人間くささ」をそこで落とすのである。「人間くささ」とは換言すれば、自我(我執)と呼べるかもしれない。「存在」を真に知るためには、「我」への執着を捨て、他の生物同様そこに溶け込む他ない。しかし、我々人間が「我」を完全に捨てきることなど、本当にできるのであろうか。

<sup>4</sup> ハイデガーは以下のように述べる (『存在と時間』)。

現存在が存在的に際立っているのは、むしろ、この存在者にはおのれの存在においてこの存在自身へとかかわりゆくということが問題であることによるのである。(Heidegger1927/原・渡辺訳 2003 : 33)

### 3. 神社（鎮守の森）—その本源的在り方—

#### ①エネルギー交換所としての神社

神道における「空開処<sup>リヒトウツグ</sup>」・「通路<sup>パスアージュ</sup>」とは、具体的に何処か—それは端的に「神社」である。宗教学者の鎌田東二は以下のように述べている。

.....神社は異界や他界との接点であり、アクセス・ポイントだから。次元変換点だから。エネルギー交換所だから。つまるところ、そこは未知なる不可解な世界や宇宙とつながっている宇宙ステーションなのだ。（鎌田 2003 : 19）

おそらく我々人間が「異界」と最も明潤に接触できる場こそ、神社なのであろう。そこはこの世とあの世、人と神、存在者と「存在」とが混じり合う特殊な場である。鎌田は、神社を「宇宙ステーション」と呼ぶ。つまりそこは、「宇宙」という根源と人間世界（地上）とをつなぐ場であり、また我々は地上では決して得ることのない感覚をそこで味わうのである。「宇宙」からのエネルギーを直に受けつつ未だ自我を保っている—さらに「宇宙ステーション」である限り、我々は宇宙といういわば「根源」へ呑み込まれる危険性をはらみながらも、何とか地上へ帰る「退路」は確保している—、そのような意味でそこは非常に特殊な場なのである。

そこで得る感覚は神秘的なものであり、また不気味なものである。おそらくそこで人間は最初、神々しさとともに「安心感」を得るのであろう。それは母胎の真っ暗な羊水の中における無重力状態に居るようなものである。しかし、人間はそこに永遠に留まることはできない。真っ暗闇の無重力状態において、人間はその暗闇に全てが吸収されてしまうのではないかという、根源的な「不安」に襲われるのである。そこにおいてこそ、人間に元来備わっている（備わってしまっている）「自己保存の欲求」は最大限に発揮される。落としたと思っていた「人間くささ」は、やはり人間が人間である限り、そう簡単には落とさきれていなかったのである。「我」はむくむくと湧き上がり、結局我々は「根源」から分裂してしまう。そして再び「根源」へと思いを馳せるのである。「分裂」と同時に自己は他者を「区別」する。自分以外のものを見出さなければ（「区別」しなければ）、自己は自己であることができないのである。

「根源（統一）」→「不安」→「分裂」・「区別」→「根源（統一）」→「不安」→.....この循環は、人間であろうとする限り、永遠に続く。人間は「根源（統一）」に留まり続けることはできないのである。これはある意味では「不幸」なことだと言えるかもしれない。しかし、人間は「根源（統一）」から「分裂」してしまうからこそ、「根源（統一）」の素晴らしさを知ることができるのである。—「エデンの園」に留まっているときには、そこが楽園であることも、自分たちが幸せであることも感じることはできないのである。そこから離れて初めて「幸せ」とは何たるかを知ることができるのである。

## ②「ウーシア」としての鎮守の森

神社<sup>5</sup>においては、「神」を模造したいわゆる「神像（存在者）」は基本的にない。あるのは大抵「鏡」である。「神」（存在）は本来、姿・形を持たないのである<sup>6</sup>。境内<sup>7</sup>にある「鏡」が映すのは、それを見ている自分とその自分を取り囲む全て——「存在」そのもの——なのである（とは言え、そもそも御神体である「鏡」は通常見ることは許されてはいないのだが）。つまり神道においては、「存在」を「存在者」に貶めるようなことはないのだ。

神社とは神殿のみを指すのではない。本来、その周りの自然（巨木・滝・泉など）、つまり鎮守の森（杜）を含めて「神社」は成り立っている。というより元々、特に「畏<sup>かしこ</sup>き」自然がある場所に神社が建てられたのだ。つまり「泉が湧き、巨木が生い茂り、さまざまな動植物によって豊かな生命の営みが保たれている場所に（鎌田 1999：111）」、神社（社殿）が建てられたのである。古来我々日本人にとって、森とはまさに「根源的な場」であった。それは決して征服すべき対象ではなかった。森（自然）は、アリストテレスの言う「ウーシア ousia」と呼んでも良い。「ウーシア」は本質（根源）であり、また「個物」を離れて存在することはない。当然「ウーシア」無しに、個的生命も在り得ない。全てを包み込むと同時に、個人の生にも含まれている「ウーシア」＝鎮守の森は、日本人にとって、まさに「根源」だったのである。

<sup>5</sup> それなりの規模の神社には、男性の「神主」がいる。かつて神主は「仲執り持ち」と呼ばれていた。つまり、神主は本来、神々の言葉を取り次いで人々に伝える、あるいは逆に人々の思いを神々へ伝える「媒介者」だったのである。しかし、そのような「シャーマン的」能力を持つ神主は、次第に「シャーマンからプリースト、つまり祭司的な儀礼執行者として、律令体制以降整理され（鎌田 1999：114）」、古代における女性シャーマンは、男性の神職<sup>あめのこやね おおたたり</sup>を取って代わられてしまった。「卑弥呼のような、あるいは天宇受売命や神功皇后のような女性シャーマンから、天児屋命や大田田根子のような男性神職、男の祭り手に移行して（同上）」いったのである。これは、律令体制による神社祭儀、神祇体系の整備のためであった。女性神職は、現在では「巫女」として、あくまで補助的神職を担っている。しかし今見てきた通り、古代においては女性神職＝巫女（女性シャーマン）の方が圧倒的に重要な立場にあった。

<sup>6</sup> 元来、神道における「神」の姿や形は、人間の目には見えないものである。『古事記』によると、高天原に現われたという天之御中主神他五柱の神々は「独身<sup>ひとりがみ</sup>」で、しかも「隠身<sup>かくりみ</sup>」であったという。「隠身」とは、身体が隠れて見えないという意味である。ところが、目には見えなかった日本の神々は、仏教の影響により姿を現してくるようになる。神像の制作である。日本の神々は仏・菩薩との融合を始め、姿を現わすようになるのである。例えば、白山権現や熊野権現、山王権現などである。また神に菩薩号を付すことも盛んに行われた。代表的なものは八幡大菩薩である。しかし、明治初年の神仏分離令は、このような権現や菩薩など、仏教語を使用した神号や本地仏を御神体にすることを禁止したので、神々は再び姿や形を消していくことになった。（三橋 2005：70,73,74 参照）

<sup>7</sup> 我々は、境内に入るには、まず「鳥居」を通る。この「鳥居」は、神域を表示するために建てられた一種のランドマークであると同時に当然、門である。しかしそこには扉はない。この「来るもの拒まず、去る者追わず」的な開放感のある態度が大きな特徴である。「鳥居」の語源には定説はないが、「通り入り<sup>あまのいわと</sup>」がなまったものという説がある。また一説にはアマテラスが天岩戸<sup>あまのいわと</sup>に隠れたとき呼び戻す為に、常世の長鳴鳥（ニワトリ）が鳴いたという故事から、ニワトリの止まる木（鳥が居る処）を造るようになったとも言われている。（菅田 2004：125 参照）

博物学者・民俗学者として知られる南方熊楠（1867～1941年）が「神社合祀反対運動<sup>8</sup>（現在の所謂「エコロジー運動<sup>9</sup>」の先駆け）」において重視した事柄は、この「根源的な場」、あるいは「生命そのもの」たる鎮守の森を、近代合理主義の下、破壊させないということであった。彼は、それが失われることは、日本人の日本人性が失われることだと考えていた。

秘密とてむりに物をかくすということにあらざるべく、すなわち何の教にも顕密の二事ありて、言語文章論議もて言いあらし伝え化し得ぬところを、在来の威儀によって不言不筆、たちまちにして頭から足の底まで感化忘るる能わざらしむるものをいいなるべし。…(中略)…かくのごときは、今日合祀後の南無帰命稻荷祇園金毘羅大明権現というような混雑錯操せる、大入りで半札をも出さしやならぬようにぎっしりつまり、樹林も清泉もなく、落葉飛花見たくてもなく、掃除のために土は乾き切り、ペンキで白塗りの鳥居や、セメントで砥石を堅めた手水鉢多き俗神社に望むべきにあらざるなり。[1911年8月29日付松村仁三宛書簡]（全集7, 1971: 506、傍線—唐澤）

上記書簡は、熊楠による「神社合祀反対運動」の際、民俗学者・柳田國男（1875～1962年）によって『南方二書』として識者に配布されることになるものの一部抜粋である。熊楠による「神社合祀反対」の主張の根底には、このような「感覚」があった。つまり、我々「個的生命」の土台・根底たる「生命そのもの」とでも言うべき森＝「ウーシア」からの、「言語」「文章」「議論」では言い表し難い（明示化し難い）強烈な「感覚」である。しばしばこの「根源的な場」と個体が生命活動を実際に営む場との間に立つことができた熊楠は、「根源的な場（統一）」からの力を、特に敏感に感受することができたのである<sup>10</sup>。いや、熊楠だけではない。古来、日本人にはこのような力を感受することに関

<sup>8</sup> 1906年、第一次西園寺内閣は、「神社合祀」を全国に励行した。これは次の桂内閣にも引き継がれた。「神社合祀」とは、各地ある多くの神社を合祀して、「一町村一神社を標準とせよ」というものであった。これに真っ先に異を唱えたのが、南方熊楠であった。熊楠は、当時日本ではかなり珍しい「エコロジー」という概念を用い、運動を行った。また、以下の八つのスローガンを掲げ、地元の新聞に論陣を張った。「神社合祀は、第一に敬神思想を薄うし、第二、民の和融を妨げ、第三、地方の凋落を来たし、第四、人情風俗を害し、第五、愛郷心と愛国心を減じ、第六、治安、民利を損じ、第七、史蹟、古伝を滅ぼし、第八、学術上貴重の天然記念物を滅却す。」最初は孤軍奮闘であったこの運動は、徐々に広まり、知識人・官僚を動かすようになる。結果、1910年、「神社合祀令」は廃止され、一応の収束をみた。

<sup>9</sup> 最近流行りの「エコ」であるが、たとえそれを概念として理解しても、実は何の進展もないのではないだろうか。また、よく世間で標榜されている『地球に優しい』とは一体どういうことなのか——噛み砕いて言えばそれは、自然（地球）を人間と対立するものとして見（対象化し）、人間が自然を守る（守ってやる）、ということである。それは結局、自然を人間のコントロール下に置くということではないだろうか。またそれは西欧的自然観に基づく考え方である。人間は自然において成り立っている、そして自然こそが「ウーシア」である。そのことを感じ得ないままでは、真の「エコ」は達成されない。森羅万象に神々を宿す神道の在り方こそ、「エコ」の本来の姿ではないだろうか。神社（鎮守の森）を、古来日本人が、なぜ、どのように守ってきたのか、その事柄の本質をいち早く見抜いた熊楠の「神社合祀反対運動」は、やはり彼の慧眼であったと言える。因みに、日本で初めて「エコロジー」という言葉を掲げて運動を起こしたのは、熊楠だと言われている。

<sup>10</sup> 熊楠は、論考において、以下のようなことを述べている。

なかんずく予は熊と楠の二字を楠神より授かったので、四歳で重病の時、家人に負われて父に伴われ、未

して、他のどの民族よりも長けていたはずである。そうでなければ神道は生まれ得なかった。しかし、西欧近代化の大波の中、日本人はこの「感覚」を忘れかけてしまっている。熊楠はそこに警鐘を鳴らしたのだ。それは、彼が特に鋭敏な感受性を持ち、また那智山（＝熊野那智大社<sup>11</sup>の「鎮守の森」という「エネルギー交換所」で、ふんだんに「根源的な力（呼び声）」を受けていたことと決して無関係ではないであろう<sup>12</sup>。

神社・鎮守の森は、確かに強力な「エネルギー交換所」だと言える。しかし実は、原・日本人にとっては、自分を取り囲む全て＝森羅万象が「神への道」であり、また「神からの道」だったはずである。今外で降っている大雨に「畏怖」の念を感じたり、今ここにある若葉に神々しさを感じたりする。——その時我々は、「根源的な場」からの力に触れている。今この場所が「神」と我々が混合する場＝「神道 The “Way” from KAMI or The “Way” to KAMI」になっているのである。そして、我々は常に既に「神と共にある」のである。神道が「随<sup>かんながら</sup>神の道」と呼ばれることが、この事柄をよく表している。（周知の通り「随」には「……と共に」という意味がある）。神社・鎮守の森はあくまでその最たるものなのである。神道とは、「The Way from KAMI」でありまた「The Way to KAMI」である。そしてここでもう一つ重要な意味を付け加えるならば、それは「The Way with KAMI」であろう。

#### 4. 産霊—始まりと終わりに関わるもの—

神道においては、「産霊<sup>むすひ</sup>」が最も重視されている。

「産霊」とは、今日の「縁結び」の概念につらなる、新たな生命を生むことをさす言葉である。生命のないところから萌え出たものが神であり、生き物を生み出すことをつかさどるものが神であった。もっとも古いかたちの神道では、生命力を神格化したものが尊い神とされていたありさまがわかってくる。（武光 2003 : 35）

つまり「産霊」とは、新たな生命体を生み出し、作り出す「力そのもの」とであると言える。そして神道においてはこの「産霊」が最大の善行と言われている。なぜなら神道には万物が生き生きと繁栄することを最上とする思想が根底にあるからである。つまり神道とは端的に、生命の尊重の上に作ら

---

明から楠神へ詣つたのをありありと今も眼前に見る。また楠の樹を見るごとに口にいうべからざる特殊の感じを發する。[1920年11月「南紀特有の人名—楠の字をつける風習について—」『民族と歴史』4巻5号]（全集3, 1971 : 439、傍線—唐澤）

自分の名に「楠」を持つ熊楠にとって、やはりそれは特別なものであった。ここには熊楠による、いわば「アニミズム的思考」が垣間見られる。

<sup>11</sup> 那智大社の熊野夫須美神は、フスミムスヒで、あらゆる生命を生み出す力を意味している。人々は、那智の滝の、絶えず勢い良く流れ落ちる清冽な水流に、生命力のほとぼしりを見たに相違いない。（島田 2005 : 87 参照）

<sup>12</sup> 熊楠はロンドン遊学を終え、帰国後、1901～1904年にかけて那智山に孤居し、生物採集と標本整理に精を出した。この時、彼の思想は非常に深化し、独自の「存在論」とでも言うべき「南方曼陀羅」の思想を構想している。



れたものである、と言うこともできるであろう。故に、生命力の枯渇した状態、「気が枯れた状態」＝「穢れ」を最も忌み嫌うとも言える。

高天原に最初に現われた造化三神の中には「むすひ（むすび）」の名が付く二柱の神がいる。  
たかみむすびのかみ かみむすびのかみ  
 「高御産巢日神」<sup>13</sup>と「神産巢日神」<sup>14</sup>である。日本神話（『古事記』）の始めに現われるこれら二柱の神は「創造」を神格化したものであるという。「高御産巢日神」は、『日本書紀』では天孫降臨や神武東征の場面で命令を下すなどを行っている。たかみむすびのかみ おおげつひめのかみ  
 「神産巢日神」は、大気津比売神の死体に穀物が発生したときにこれを取って種としたなどと『古事記』に伝えられており、主に生産的な面において活躍する。両神が神話の始めに出てくるとのこと、さらに両神が「創造」の神格化であり、また神道において最も重要といえる「むすひ（むすび）」をその名に持っていることは注目すべき点であろう。

本居宣長の『玉くしげ』には次のような一節がある。

まづすべて人と申す物は、かの産霊大神の産霊のみたまによりて、人のつとめおこなふべきほどの限は、もとより具足して生まれたるものなれば、面々のかならずつとめ行ふものなり。（本居 1787／村岡校訂 1925：34、傍線—唐澤）

宣長はここで、人というのはみな、産霊神の御魂から生れたので、生来、努めて行うべきことは知っているはずだと述べている。「みたま」の「たま」とは「魂」、「玉」あるいは「霊」とも書くが、その語源は「タマリ」、「タマル」であるという。つまりそれは、霊力が「溜まる」場とも考えられるという。つまり、生命の元素たるすべてがそこには詰め込まれているのである。そこは混沌としており、この世に誕生するもののすべてが凝縮された場でもある。

以上、見てきた通り、「産霊」は「始まり」に深く関与している。しかし一方で、我々は「むすび」が物事を終わるとか閉じるとかの意味でしばしば用いられていることも知っている。例えば、論文などの「むすびの章」や、相撲などの「むすびの一番」などである。

さらに、「産霊」の「むす」は「息子」むすこ「娘」むすめの「むす」にも通ずると言われている。人生の途上で男女が「結ばれ」、そしてその後生まれる子には「むす」が宿っている。つまりそれは、例えば苦などが増え繁殖するような「力」である。そして人が死ぬとき、「息を引き取る」と言うが、これはつまり残された者が、亡くなる人の「息（むす）」を引き受け、引き継ぐことを意味する（因みに、「産霊」の「ひ」は「太陽の霊力と同一視された原始的な観念における霊力の一（岩波古語辞典）」である）。

—このように「むすび」に始まり「むすび」に終わる神道には、常に「産霊」が通底音として流れ

<sup>13</sup> 高御産巢日神：ムス（生成する）とヒ（神霊）との合成語にタカという「高処から降臨する」という語が付いたものである。このことから、宇宙の生成を掌る神という意味を持つ。（岡田 2005：99）

<sup>14</sup> 神産巢日神：神名は、神々しく神聖な生成の霊力という意味である。生命体の蘇生復活を掌る至上神としての霊妙な神格を、高御産巢日神と並べて二元的に神格化したものとされている。（岡田 2005：99）

ているのである。

結局、この「産霊」という「万物を成らしめる根底的で不思議な力」がある場合こそが「The Way to KAMI」であり「The Way from KAMI」となり得るのである。そうだとするならば、その「道」「通路」は、我々の生活のごく身近に、常に既に在ることになる。繰り返しになるが、「神社」「鎮守の森」は、特にそれが明らかに感じられる場である。

## 5. Something Great な感覚—それを宿したそれに包まれているということ—

熊楠は、神社において得られる感覚について、以下のように述べている。

神社の人民に及ぼす感化力は、これを述べんとするに言語杜絶す。いわゆる「何事のおはしますかを知らねども有難さにぞ涙こぼるる」ものなり。似而非神職の説教などに待つことにあらず。神道は宗教に違いなきも、言語理屈で人を説き伏せる教えにあらず。[1912年2月9日付白井光太郎宛書簡] (全集7, 1971: 550-551、傍線—唐澤)

何か本質的なものが、自分の前に開かれていることを、その身を持って（全身で）体感（感得）する時、我々は、「何事のおはしますかを知らねども有難さにぞ涙こぼるる」感覚に包まれるのである。それは「言語」による表現を超えている。だから神道に「教典」がないのは当然のことなのである。そのナチュラルな神秘感<sup>15</sup>は、感じ取ることしかできない。しかしそれは、論理化できなくても「了解」はできるということでもある。

化学者の村上和夫<sup>15</sup>は、生命の不思議あるいは生命そのものを「サムシング・グレート」と呼ぶ。

「こんな小さな遺伝子の中に人間の設計図が書き込まれているのだ」と感慨にふけていたとき、ふっとひらめいたことがありました。「解読できるということは、それを誰かが書いたからだ」ということに行き当たったのです。

誰が書いたのか。人間にはとてもできることはありません。そのとき、何か人知の及ばない力がそこに働いているということに、私は愕然とするやら、感動を覚えるやら、不思議な感覚に包まれました。そして、人知を超えた何者かという意味で、「サムシング・グレート」とい言葉を思いついたのです。(村上 2012: 167-168)

村上の言う「サムシング・グレート」とは、言語による説明を超えた「存在」であり、我々存在者の基底にあり、我々を大きく包み込む「何か」（人知を超えた、つまり人間がもはや問い得ない、表現

<sup>15</sup> 村上和夫（1936年～）：分子生物学者。筑波大学名誉教授。1983年に高血圧を引き起こす原因となる酵素「ヒト・レニン」の遺伝子解読に成功。教派神道の一つである天理教の熱心な信者でもある。

不可能な「何か」である。神道における「畏怖のトーン」「産霊」への礼賛もこれと同じであろう。

Something Great—それは常に既に在る。我々はそこにおいて在る。だが、日常の雑事に忙殺され、また「世人」たる自分に気付かないとき、「それ」は忘却される。「それ」は我々の最も身近にあるが故に、最も遠くに感じられるのである<sup>16</sup>。しかし、どんなに西欧合理主義に毒されようと、古来「神道の感覚」がその心身に刻まれた我々日本人は「それ」を、少なくとも神社や鎮守の森という「通路」（神々と人間が混じり合い交感する場）においては、まだきつと感得できるはずである。

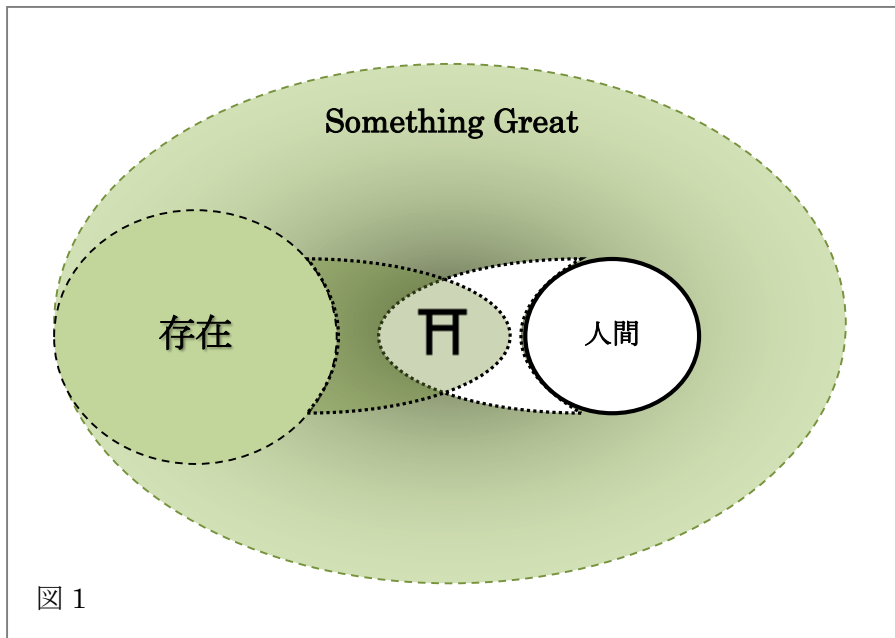


図 1

「図 1」は、「人間」と「存在」、両者が混じり合う「神社」、そしてこれらに全て含まれながらも超えて出ている（と言っても、手の届かぬ彼岸に在るという意味ではなく、むしろこれらを大きく包み込んでいる）「Something Great」、それぞれの関係（在り方）を表したものである。「存在」は人間に「呼

<sup>16</sup> 我々人間にとって、最も近くいが故に最も遠いこの「Something Great」は、「通路」たる神社で感得できるが、一方、そこから徹底的に「距離」を採ることでも知ることができると思われる。例えば、宇宙飛行士は、今まで自分が包まれていた地球から飛び出し、それを客観的に見ることで、いわゆる「神秘体験」を得ることが多い。ジェームズ・アーウィン（James Brown Irwin 1930～1991年、宇宙飛行士、退役後は牧師）は、「これほど見事な、美しい完璧なものを神以外に作ることはできない」と言い、エド・ギブスン（Edward Gibson 1936～、宇宙飛行士）は「これは特筆すべきことだと思うのだが、宇宙体験の結果、無神論者になったという人間は一人もいないんだよ」と言う。ラッセル・L・シュワイクアート（Russell Louis "Rusty" Schweickart 1935～、宇宙飛行士）はこう語る。「私は無重力の中を 10 日間旅をした。美しい地球の周りを回り、1 万 7000 マイル下の景観がたえず姿を変えていくのをこの目で見た。この強烈な体験のおかげで、私は地球との新たな関係に目覚めた。…（中略）…それは地球の圧倒的な美しさである。明るい鮮やかな色合いに満ちた地球と、無限に広がる漆黒の闇。その鮮やかな対比を見ているうちに、突然悟った。生きとし生けるものはすべて、この地球という母なる星と切っても切れない関係にある。そして、さけることのできないこの繋がりを思い、畏敬の念にみだされた」。つまり、彼らは Something Great から「距離」を採ることによって、逆にそれを痛烈に感得したのである（因みに、日本人初の宇宙飛行士である秋山豊寛（1942～）は宇宙から戻って来た後、退職し農業を始めている）。

びかける。「人間」はその声に答える。逆に「人間」は「存在」へ祈念する。また「存在」は、そのような「人間」に耳を傾ける。そのような意味で、図においては、両者には「舌」のような隆起物を描いた。そしてそれらが混じり合う部分こそが「神社」なのである。「Something Great」は「存在」という、いわば「人間」の手垢の付いたものではなく、つまりそこから分裂した後に考え出された「存在」（人間的統一）ではなく、もはや人智が及ばない「根源（的統一）」なのである。それは科学的に「分析」はできない。しかし、我々はそれをこの身に含みつつ、またそれを基盤として生きているのである。

### おわりに—神道が教えてくれること—

「Something Great」——それは常に既に在る。我々人間は、それをこの身に宿しながら、それに包まれて生きている。このような在り方こそ、また本来的・根源的「絆」、「むすび」、「結びつき」である。そしてそこから流れてくる大いなる力は、特に神社という「通路（The Way from KAMI あるいは The Way to KAMI）」＝「結び目」で感得される。一方で実はそこから徹底的に「距離」を採ることも、それは痛烈に知られ得るのである。それは神社で感得されるものよりも、より強烈で圧倒的なものかもしれない。あまりにも「近く」に在り過ぎるが故に、あまりにも「遠く」に在る「Something Great」から徹底的に「距離」を採ることは通常できない。しかし時に我々はそこから無理矢理突き放されることがある。「Something Great」からの「語りかけ」があまりにも大きく、それを人間が受けとめきれない時、人間は「Something Great」をその身に含みながら「Something Great」から突き放されるのである。3.11はまさにそのような出来事であった。突き放された我々は、改めてその「存在」に気付かされた。「結びつき」に気付かされた。同時に人と人、人と科学技術との「結びつき」にも気付かされた。「生命とは何か」、「自然とは何か」、既に知っていたようで実は何も知らなかった事柄の本質に直面した我々は、今、何をすべきであろうか。我々はそれらを克服すべき「答え」を見出せるだろうか。否、そのような「答え」を求める「構え」が、科学技術への盲信とその暴走を生むのである。そもそもそれらは克服すべき対象ではないはずだ。それらは共に生きるべき我々そのものなのである。

奇しくも人間には「語りかけ」に「呼応」する特性が備わっている。他の動物はその「語りかけ」を受容するだけである。そのような意味では、動物においては「語りかけ」さえ存在しないと言えるかもしれない。「呼応」できる人間は「Something Great」の素晴らしさと共にその恐ろしさも知り得る（しかし当然その事が、人間が他の生物より優れていることに直結はしない）。この「畏怖の念（感嘆、崇敬の念）」を持つ人間が採るべき道、それは「Something Great」を対象として克服するのではなく、思惟し、それと共に生きることである。「Something Great」随まにまに生きることである。神道（随まにま神かんながらの道）は、この重要性を我々に静かに、しかし力強く教えてくれている。

### 参考文献

- ・岡田芳幸、「天地創造・原初の神々」、『大法輪 第72巻1号』、2005年
- ・鎌田東二編著、『神道用語の基礎知識』、角川選書、1999年
- ・鎌田東二、『神道のスピリチュアリティ』、作品社、2003年
- ・小泉八雲、『杵築—日本最古の神社—』、みすず書房、平井呈一訳、1955年
- ・川原栄峰、『ハイデッガーの思惟』、理想社、1981年
- ・島田潔、「全国各地で祀られる著名な神々」、『大法輪 第72巻1号』、2005年
- ・菅田正昭、『面白いほどよくわかる神道のすべて』、日本文芸社、2004年
- ・武光誠、『日本人なら知っておきたい神道』、河出書房新社、2003年
- ・Hearn, Lafcadio, *GLIMPSES OF UNFAMILIAR JAPAN volume 1: KITZUKI : THE MOST ANCIENT SHRINE OF JAPAN*, 1894/Yushodo Booksellers Ltd. 1981
- ・Heidegger, Martin, *Sein und Zeit*, 1927/邦訳：原佑・渡辺二郎、『存在と時間』、中央公論社、2003年
- ・Heidegger, Martin, *Identität und Differenz*, 1957/邦訳：大江精志郎、『同一性と差異性』、理想社、1960年
- ・Benjamin, Walter Bendix Schönflies, *Das Passagen-Werke*, 1928~1940/邦訳：今村仁司、『パサージュ論』1巻、岩波現代文庫、2003年
- ・三橋健、「日本の神々」、『大法輪 第72巻1号』、2005年
- ・南方熊楠著、飯倉照平校訂、『南方熊楠全集 3』、平凡社、1971年
- ・南方熊楠著、飯倉照平校訂、『南方熊楠全集 7』、平凡社、1971年
- ・村上和雄、『科学者の責任—未知なるものとどう向き合うか—』、PHP研究所、2012年
- ・本居宣長著、1787年/村岡典嗣校訂、『玉くしげ、秘本玉くしげ』、岩波書店、1934年

**Re-consideration about Shinto**  
**—The Sense of Admiration and Veneration to Something Great**

**KARASAWA Taisuke**

Shinto makes us think of "the connection." Shinto makes us think of "the life itself". How should "the connection" with neighbor and us be? What is "connection" with ancestor and us?

"The life itself" is making us there be. It can also be put in another way as "the nature itself." How should "the connection" with "the life itself" and us be? Considering Shinto specifies "The Way" to these questions. Now, the state of "the bonds" is asked in Japan. Therefore, we have to improve the Shintoism way that should be.

The words "Shinto" have two meanings. One is "The Way from God", and another is "The Way to God." And in Shintoism, "Musuhi" is very important concept. In this paper, the state of Shinto is clarified based on these keywords.

Keywords: Shinto, Musuhi, Kumagusu Minakata, Passage, Something Great